人類の未来に対する仏教の可能性

リチャード・ゴンブリッチ
前川健一　訳

光栄にも、四十分にわたりお話しさせていただく機会をいただきました。今回、私はこの表題（「人類の未来に対する仏教の可能性」）を与えられ、仏教と人類の未来について講演をしてほしいとの要請を受けました。どちらも非常に大きな話題です。両者を一緒にしたからといって、決して小さくなるというものではありませんので、私は厄介な課題に直面していることになります。

仏教も人類も、現在まで、大変に長い歴史を有しています。私が聞いた範囲では、これまでの人類の存続が仏教にかかっていたと示唆する人は誰もいませんでしたが、他方、私の考えでは、人類のかなりの部分の人々が仏教の存在から恩恵を受けているということに、私たちの大多数は同意するでしょう。これを証明するのは難しいことですが、そうであるということにしておきたいと思います。そこで、私が推察するに、主催者が議論を期待しているのは、仏教に人類の未来を延長する力があるのか、あるとすれば、より良い未来を

もたらすのか、ということでしょう。

仏教は暴力にどのように対処するのか？

仏教は人類の未来を延長できるのかと問うた時、私たちがまず考えるであろうことは、人類の未来を脅かす差し迫った脅威のことでしょう。二十世紀後半のほとんどの期間、最も切迫していた脅威は、核戦争によって人類という種そのものが消滅することであったと思われます。私はその期間を実際に生きましたが、その脅威が頂点にあったのは一九六〇年代でした。当時、多くの人が、アメリカに主導された西側とソヴィエト連邦との間の核兵器競争に大きな恐怖を感じ、生き残るための唯一の希望は一方的な軍縮にあると考えるほどでした。これは西側による軍縮を意味していました。というのも、ソヴィエト連邦が軍縮を主導しそうにないことは明らかだったからです。各国政府は説得されることはなく、平和をもたらす最良の希望は、彼らの言うところの「勢力均衡（balance of power）」にあると論じました。現在、私たちは、そうした政府が正しかったことを知っています。というのも、核兵器は使われませんでしたし、実際に起きてしまったらどうなるかという恐怖のため、超大国同士は直接的で暴力的な衝突を避けたのです。

一九八九年、ソヴィエト連邦は、事実上、兵器競争を放棄せざるを得なくなりました。何故なら、それには膨大な費用を要したからです。鉄のカーテンは落ち、多くの国々の国民がソヴィエトの暴政から解放されました。大いなる楽観論がありました。ところが、何ということでしょう。この雰囲気が持続することはありませんでした。勢力の分散は核拡散につながってしまい、破壊的な兵器は、その使用を思いとどまらせることが容易ではない指導者たちの手に落ちました。例を挙げれば、勢力均衡といった類いの理性的な考えによって、北朝鮮に核兵器の使用を思い留まらせることができるか、確信は持てません。これは仮想にすぎません。しかし、最近でも、私たちは、シリアが内戦で化学兵器を使用するのを目撃しましたし、ロシアとアメリカの二頭体制の遺物だけがこの危機を鎮圧できたの

です。こうした恐ろしい武器を入手する国家はますます多くなるでしょうし、国家以外の小集団が入手することすらあるでしょうから、未来予想が安心をもたらすことはありません。

誤った環境政策もまた人類の存続を脅かしていると、多くの人が論じています。それは確かに正しいのかもしれません。とは言うものの、局地的な災害はともかくとして、人類全体の存続そのものが危ぶまれるといったことになるまでには、長い時間がかかるでしょう。同じことは、我々にとっての伝統的な仇敵、すなわち飢饉や疫病についてもあてはまります。戦争と暴力は、相変わらず群を抜いて最大の脅威なのです。

こうしたこと全てにおいて、仏教はどのような役割を果たすのでしょうか？　エコロジーに関して言えば、確かに、タガが外れた消費主義の危険に目を向け、より健全な社会を目指す仏教の運動は存在しています。私はそうした運動を歓迎しますし、過小評価するつもりもありません。しかし、それらはまだ世界の舞台で大きな役割を果たしてはいないということを指摘しなければなりません。今日、仏教が暴力に対してどう対処しているのかを考えることは、より緊急性があると私は思います。

残念ながら、状況は気が滅入るものです。仏教がブッダによって創始されて以来、不危害（non-aggression）は仏教の中核的な価値であり続けています。ここで用いられている言葉は、アヒンサー（ahiṃsā）です。この言葉はしばしば非暴力（non-violence）と訳されていますが、それは正確ではありません。正しい意味は「危害を加えようとする欲望の欠如」ということです。言い換えるなら、「不危害」ということになります。『ダンマパダ（法句経）』と呼ばれる古代パーリ語の韻文集では、以下のようにあります。

「なべてのものに　力振るわず　殺すことなく　殺さしめぬ。彼ぞ聖（ひじり）と　我呼ばむ」（第四〇五詩）

「この世には　怨み鎮むる　怨み無し。怨み無きこそ　怨み鎮むる。永久（とは）なる法（のり）は　これにこそ」（第五詩）

さらに、どのようなものであれ、呼吸しているものの命を奪うことはないという誓いは、どの在家仏教者も常に守らなければならないはずの五戒の第一です。また、それとは別に、あらゆる在家者が慎まなければならない有害な行為（akusala kamma 不善業）の標準的なリストがあります。そうした行為の中には、粗暴な言葉や悪意のある言葉（pharusā, pisuṇā vācā 麁悪語、離間語）も含まれています。ここではっきりさせておきますが、これらは在家者にとっての規則です。何故なら、出家者は、より厳しく詳細な規則に従わなければならないからです。しかし、仏教徒と思われたいという人なら誰でも、一般的な原則に従う義務があります。

必要なのは「敵を愛する」ことではなく「憎むのをやめる」こと

実際、さらに先まで行って、仏教徒なら誰でもあらゆる時に慈悲（優しさと共感）を実践しなければならないと論じる人もいるかもしれません。しかし、私の議論の文脈では、「〜するなかれ」との禁止形で示された、より穏やかな要求だけを論じる方が、より多くの手助けを与えてくれるでしょう。結局のところ、人類が生き残るための最小限の要求は、私たちが互いを殺したり憎んだりするのをやめることです。私たち全員が積極的な優しさにあふれた振る舞いをするというのは高貴な理想ではありますが、生き残るために必ず必要というわけではありません。それに、そうしたことがいつか達成されると期待するのは、おそらくは現実的ではありません。

こうした原則があるとして、こうした問題をよく考えたことのない人々は、仏教にとって、不危害は妥協を許さないことだと思い込む傾向があるようです。一言で言えば、仏教は絶対平和主義を主張していると思うのです。こうした人たちは、仏教者、さらには仏教指導者さえもが、しばしば暴力行為に及んでいたことが分かると、失望して、しばしば反対の極に振れてしまい、仏教の非暴力の主張はただの偽善であり、仏教者は昔も今も他の人々と全く同じくらい暴力的だなどと言うに至るのです。それ故、この問題をさらに分析

する必要があります。

仏教的価値を公の問題に応用したということは、紀元前三世紀の中葉三分の一にわたって、インド亜大陸の大部分を支配したアショーカ王によって、忘れがたい形で、記録に残されています。紀元前二五五年頃に年代づけられる大磨崖法勅第十三章の中で、アショーカ王は、極めて多くの人々が殺され負傷し追放されたカリンガ国（現代のオリッサ州）との戦争をきっかけとして、自らの統治がどのように始まったかを記録しています。彼は、深い自責の念を示し、侵略戦争は二度と起こさない、ただし攻撃された場合の自衛権はしっかりと保持する、と述べています。この詔勅の文章は、人類史上、最も立派な公文書の一つですし、全世界の学童たちに教えるべきものです。インドの民族主義的な歴史家たちが、この不危害という政策のせいで、アショーカの後継者たちは権力を失ったと示唆している（そして、教科書にもそう書いてある）のは、いささか皮肉なことです。彼らの主張を支える証拠はありませんが、不危害が有効でありうると信じるのを人々は躊躇します。

しかしながら、マハトマ・ガンジーの成し遂げたことからすれば、そうした躊躇はほとんど馬鹿げたことに見えかねません。私たち皆が知っている通り、ガンジー自身が目覚ましいほどの成功を収め、英国のインド支配をやめさせただけでなく、万人から称賛を勝ち得ている偉大な指導者たちに精神的影響を与えました。マーティン・ルーサー・キングやネルソン・マンデラといった指導者たちのことを考えてみてください。彼らの非暴力は時として短期的な挫折をもたらしましたが、最終的には、暴力によって得られたであろうものよりもはるかに多くのことを達成したのです。

政府はいかにして暴力を最小化できるか

今触れたばかりのアショーカ王の場合において、私は実のところ二つの問題を一つにしていました。一つの問題は、攻撃、つまり先に暴力を振るうことと、防御、つまりそれに反撃することとの違いです。もし誰かが私を攻撃した時、私はそれに反撃しないようにすることもできますし、さらには、イエス（訳注＝いわゆるイ

エス・キリスト）の言葉を借りれば、もう一方の頬を向けることさえできます。しかし、攻撃された人々が私に保護を求めてきたら、状況は異なります。このことの最もありふれていて、最もはっきりしている例は、子どもの命を守るために親は出来ることは何でもするに違いないということです。もちろん、逆に子が親を守る場合も同じことが言えます。

他者に対する責任の問題は私たちを、より大きな問題、つまり、公共生活に関わる広範囲な領域、私たちが今後直面する可能性のある一連の新たな状況へと導いていきます。仏教の伝統では、僧侶は公共生活において重要な役割を果たすと考えられていません。それ故、そうした伝統に従う限り、公的な役割を担うことから帰結する道徳的ジレンマに直面することは全くなかったのです。

しかし、在家者であれば、そういうことは確実にあります。絶対平和主義者であったガンジーでさえ、インドの兵士たちに兵役義務からの脱走や、ないしはその放棄を求めなかったことは、覚えておく価値があります。二千年以上も前の『律蔵』[1]は我々に次のようなことを語っています。ブッダの友人であるビンビサーラ王は、国境付近で紛争を抱えており、それに対処するため軍隊を派遣しました。しかし、その兵士たちは、人を殺せば罪になり、後で苦しむことになると結論しました。そのため、彼らは僧侶になりました。大臣の一人が、こんな風にして王から兵士を奪った者は、誰であれ刑に処すべきである、と王に上奏しました。王がこの上奏に従わなかったのは当然ですが、ブッダに警告を発することはしました。ブッダは、王の意を察し、兵士を出家させてはならないという規則を制定したのです。

国家には、攻撃を阻止するために防衛軍が必要ですし、攻撃者となる側は、そうした軍事力が使用される可能性があることを知っていなければなりません（この講演の初めの方で、冷戦中の各国政府がどのように「勢力均衡」という現実的な方針に従ったのかを述べましたが、このことが思い返されます）。アショーカ王は、全世界に向けて、カリンガ国民に対して自分が戦争を起こしたこと

を、自分がどれほど後悔しているかを述べました。そして、そうしたことを二度としなくても済むように願っていると表明したのです。しかし、彼はまた、近隣国に対して、（彼の言葉によれば）「忍びうべきことはすべて忍ぶべきである」[2]が、自分を挑発してはならないと警告しています。これは確かに、政府が暴力を最小限にする正しいやり方です。

戦争は、暴力が合法化され、さらには倫理的に正当化されることもある唯一の公共生活の領域では、決してありません。死刑のことを考えてみてください。死刑制度は、仏教国であると主張する幾つかの国で、現在でも運用されています。私の考えでは、仏教を尊重すると称しながら、仏教を政治に適用するのを拒否するといった政治的指導者は、見下げ果てた偽善者です。偉大な宗教的伝統は皆、人はあらゆる人を愛し、優しさと共感がなければならないと教えています。これが意味するのは、人は、愛するのが容易な人々だけではなく、あらゆる人を愛さなくてはいけないということです。いつもあなたに優しくしてくれる人を愛するというのは、大抵の動物が本能的にしていることと大差ありません。愛は、敵や、あるいは、愛することが困難な他者に向けられた時、倫理的なたしなみとなるのです。

宗教を政治から切り離しておきたいと言う人たちが、大抵の場合考えているのは、何れかの宗教が提唱する道徳的価値を受け入れるつもりはなく、共産主義や民族主義といった他の価値を選好するということです。世界文学の中で最も有名な言葉の一つとして、紀元前二三年に発表された、ローマ詩人ホラーティウスの詩の一節があります。「甘くして適へるかな　己が国のため身罷るは」[3]。政治家は通常、偉大な宗教伝統の中で目に付く反戦観よりも、こうした感情の方を好むのです。

防衛戦争や死刑のような論義を呼ぶ事柄について議論することは重要です。しかし、私は敢えて言いますが、それは我々の主題にとっては、あまりに慎重すぎるアプローチです。残念ながら、率直な第三者の目から見れば、いわゆる仏教世界でさえ、政府機関や国家

による暴力の行使を正当化することが、非常に困難であるか、ないしは不可能であるというケースはあまりに多いということは認めざるを得ません。法律が何と言おうが、警察が貧しく無力な人々に対して、通常どのような仕打ちをしているかを考えるだけで十分です。それと同様に、国家が暴力の防止のためにほとんど何もしていないとは言え、サンガ（出家教団）の者たちを含む仏教徒たちが、自発的に暴力を行使したり、暴力を支持したりしているという事例が複数あります。

ブッダのプラグマティズムから学ぶこと

この恐るべき状況で、私は違った方針を採ろうと思います。『上座部仏教――古代ベナレスから現代コロンボにいたる社会史（*Theravāda Buddhism : A Social History from Ancient Benares to Modern Colombo*）』[4]という著書の中で、私は、支配者がどのように支配すべきか、そして人々は社会の中でどう生きるべきかという点についてブッダが与えた勧告を、幾つか記しておきました。そして、何回か機会が与えられた時には、彼の素晴らしいアドヴァイスに注意を向けようと講演を行いました。私たちの生活がどのように向上するか、人類がより良い未来を期待できるかを全世界に示すために、仏典から多くの素晴らしい言葉を引用したり議論したりすることができるかもしれませんし、もちろん、しなければならないでしょう。しかし、ブッダはプラグマティスト（実用重視主義者）でしたし、私は敢えて言っておきますが、現在の私たちは、ブッダが思い描いた類いの社会から、あまりにもかけ離れてしまっているため、曜日を問わずテレビ・ニュースで目にする悪事にどう対処するかということに関して、どのような提言であれ、考慮してみる必要があるのです。それ故、ここで仏典から多くを引用するよりも、私からいくつか提案させていただきたいと思います。時間の余裕がもっとあれば、私の提案がブッダの教えに基づいていることを示せると私は固く信じています。

個人的責任とその含意

私たちは、業（カルマ）という基本的な教え、つまり、

自己責任の教えに立ち戻らなければなりません。ブッダが説いたように、全ての思考・言葉・行いは、その背後にある意図によって、肯定的なものであれ否定的なものであれ、それぞれの道徳的価値を生み出します。これは、行為の結果が重要ではないということではありません。仏教は、過失という観念を受け入れることに関し、現代の法律と何ら変わりありません。しかし、道徳に関する基本的な不変の基準は意図です。道徳的であることも不道徳であることも個人の心理的な特質です。それらは、人がどのように生まれ変わるかということに決定的な影響を与えますし、個人の性格の中心的な構成要素です。人は自らの業の相続者であり、他の何ものかの業の相続者ではないのです！

業は、感覚のある生き物それぞれにとって本質的な要素なので、「集団的な業（collective karma）」といったものは、ブッダの教えの中には跡形もありません。この事実には、深遠な道徳的含意があります。

業は個人の責任の問題ですから、ある家族の一員として生まれるとか、自発的に加入したわけではない社会集団の一員であるといったことは、いかなる業の結果とも必然的な関係がありません。他方、神的存在に由来するものであれ人間に由来するものであれ、何か大きな力といったものが、ある人の業を定めることもありえません。私自身の意図について、私は、神や父親や教師を責めたりすることはできません。実際のところ、それは誰のせいにもできないのです（ここでは、これ以上のことを論じることはできませんが、私が、父や教師から言われたことを実行する場合、その決定に対して自分自身に責任があるという事実は、仏教を儒教倫理に対立させます）。

業は常に個別的であり決して集団的ではないという事実には、どのような含意があるのでしょうか？

この地球上には、『旧約聖書』で「目には目を、歯には歯を」と呼ばれている、復讐の原則を信じている社会が、いまだ相当数あります。あなたが私を侮辱すれば、私には、あなたを侮辱する権利があります。つまり、あなたのせいで私が鼻血を流したら、私にはあなたに鼻血を流させる権利があるのです。さて、憎しみは憎

しみによって止むことはないという『ダンマパダ』の詩を既に引用しましたので、私たちには「目には目を」の原則を受け入れることができないということは、初歩的なことのように見えます。しかし、ちょっと待ってください。もし、あなたが私の母を侮辱したら、私にはあなたの母上を侮辱する権利が――というより、義務さえもが――ないのでしょうか？　あるいは、もし母上がいない場合、ことによると姉上や妹さん、あるいは奥さんを侮辱することはどうでしょうか？　しかし、その場合、どうして侮辱だけに留めなければならないのでしょうか？　侮辱に対して原則を適用するなら、それは他のもっと深刻な形態の危害に――さらには殺害にさえ――同じように適用してはいけないのでしょうか？　もし、あなたのお祖父さんが私の父を殺したとしたら、私があなたの父上や、ことによると、あなた自身を殺すことは正しくはないのでしょうか？

こうした領域に踏み込んだ時に見えてくるものは、家族の名誉とか家族への忠誠といった考えが、どれほど道徳的に問題をはらんでいるのかということです。

私たち自身は、もはや復讐を信じるほど非文明的ではないと考えることもできます。私たちは法律も警察力もあります。ですから、誰かが家族の一員を殺したなら、為すべき正しいことは、警察に連絡して犯人を逮捕してもらい、法を執行してもらうことです。私たちの社会は、こうした状況で、いわゆる「鉄拳制裁」といったものには眉をひそめますし、そうしたものを認めないことが文明化した社会にとって本質的な要素の一つであることは確かです。

他方、直接自分が犯罪による被害を受けた時、たとえば家族が殺害された場合、犯罪者が正義に適った報いを受けるのを見届ける道徳的権利が被害者側にあるということは、我々の社会の中で一般的に受け入れられてきているように見えます。私は、ここでは英国のことに限ってお話ししたいと思います。それも、当然ながら、メディアによって私が知り得る英国についてのみです。というのは、私には他に情報源がないからです。現在、「幕引き（closure）」と呼ばれる言葉が使われています。例えば、殺人犯に終身刑の判決が出た時、

今や被害者遺族は「ともかくも幕引きを迎えた」と誰もが言います。これは、家族を失ったことに対して、今や嘆くことをやめるのが可能になったということを意味しているようです。他方、被告が有罪とされながらも、不適当と思われる判決を受けた場合、遺族は「幕引き」できませんし、仮に被告が無罪となり、犯人の捜索を続けなければならないとなれば、遺族に「幕引き」が訪れないことは深刻な不幸であるように思われます。「幕引き」をするためのもう一つの方法は、犯人を赦したり、それが無理であるならば、少なくともその悲劇から少し心の距離を置いたりすることである、などと示唆されるのを、私は聞いたことがありません。

誰かに重大な悪事が為された時、犠牲者や犠牲者に近しい人々にとってそれを赦すことは簡単なことであると私は言っているのでありません。イエスは彼の信奉者たちに、彼らに危害を加える人々を赦すだけではなく、むしろ愛しなさいと熱心に説いていますし、それは全てのキリスト者が従うように定められた規範です。私の考えでは、これは不合理であり、それ故、実用的ではありません。注意していただきたいのは、『ダンマパダ』の詩では、あなたを憎む者を憎まないようにと勧告していることです。つまり、彼らを愛するというところまで行かなければならないとは言っていないのです。私は、私たちが英雄のように振る舞おうとせず、単純に憎むのをやめるだけで、人類の生存そのものを脅かす程に蔓延した膨大な量の戦争や暴力が消え去るのではないかと考えるのです。

「アイデンティティ」という癌（がん）

こうした考えの道筋を導くために、私は、強姦や殺人といった重大な犯罪の犠牲者という非常に単純な例を取り上げました。しかし、私はこうした論理的な筋道を、ずっとずっと広い範囲に広げていきたいと思っています。その過程では、一部の人に衝撃を与えるようなことを言うのも厭いません。人々は、自分をある家族の一員だと見なしているだけでなく、たとえば民族とか、教派（church）や宗派（sect）といった宗教集団

などのような、ずっと大きな集団の一員としても自らを位置づけています。私は英国人として生まれましたし、それは私の「アイデンティティ」の一部ですが、このことは、それが、たとえば政府諸機関のようなものが私にレッテルを貼り分類する仕方、場合によっては他国の政府が私を分類する仕方であることを意味しています。過去において、英国政府はアイルランド全域を支配していましたし、時として、アイルランド人、とりわけその多数派であるローマ・カトリックの人々に対して、極めて残虐で不当な振る舞いをしました。アイルランド人カトリック教徒の中の少数派は、彼らの先祖に対して英国人が行ったことを今でも憤っており、ごく少数の人々は憤りのあまり、アイルランド共和軍（ＩＲＡ）と称される組織を作り、英国の人々を、時として無差別に、殺害しようとしました。彼らは集団的な業があると信じています。すなわち、英国人なら誰でも、他の英国人がアイルランド人に対して行ったことに責任があると考えているのです。たとえ子どもであっても、最近移民してきて、大昔に残虐な行為をした人々とは血の繋がりもない英国の人々であっても、復讐の対象として申し分ないと見なされたのです。

こうした暴力行為に与した人々の目的は、英国人とアイルランド人との間に広汎な憎しみを作り出すことでした。それによって、暴力を増幅させようとしたのです。もっとも、彼らがこの目的の実現に、全くといってよいほど成功しなかったと言えることを、私は嬉しく思っています。しかし、世界中の同様な事例を考えていただければ、こうした戦略は、失敗するよりも成功する場合の方が多いということが分かります。というのは、彼らは、たいへん消火がしにくいところに火をつけるからです。この巨大な主題を話題にするには時間が足りませんので、ここで特定の事例を名指ししたり議論したりすることはできませんが、一般的な所見を幾つか述べておく必要はあります。多くの場合、実際に暴力を振るう人々は、彼ら以外の全世界の人々から「テロリスト」と呼ばれているような、比較的小さな集団です。しかし、同じアイデンティティを共有

する多数の人々の共感を得なければ、通常、こうした組織は長続きできません。すなわち、より大きな集団が、国家の軍や警察といった、法と秩序を維持しようとする力から、彼らを保護しているのです。

私が挙げたアイルランドの例では、多くのアイルランド人ローマ・カトリック信徒が、ＩＲＡのしていることを是認していませんでしたが、他方、彼らが「あちら側」と見なしていた、英国またはアイルランドのプロテスタント、ないしはその両者に対して、彼ら（ＩＲＡ）を引き渡すこともありませんでした。言葉を換えれば、このような極端な状況下において、大抵の人がすることは、「あいつら」とか「自分たち」といった言葉で考えることです。そして、たとえ自分たちの支持する側が残忍であっても、自分たちは「こちら側」への忠誠心によって導かれなければならないと感じるのです。あなたが自分の側を支持しないならば、それは「裏切り」行為と見なされ、子どもたちを爆殺するといった類いのことよりも重い罪であると考えられるのです。

ひとたび社会の成員の大多数が、対立するグループ、つまり「あいつら」と「自分たち」に分極化してしまうと、おそらくは社会全体が荒廃し、膨大な数の命が失われることになるでしょう。この過程が昂進すればするほど、それにとらわれないようにすることはますます困難になっていきます。一九八三年、タミル人の小集団が、多数派であるシンハラ人仏教徒によって選出された政府から受けた多年にわたる差別的な振る舞いに怒って、十三人のシンハラ人兵士が乗るトラックを爆破しようとしましたが、このことによって逆に島の南部で反タミル暴動が引き起こされました。これは急速に全面的戦争へと展開し、二十六年にわたって続きました。タミル人であっても戦争に賛成しない人々のうちには、タミル人テロリストによって殺された人もいました。他方、多くの無辜のタミル人たちは、シンハラ人の軍にテロリストと見なされ、それを理由として殺されたのです。タミル人が安全を手に入れるためには、国外へ脱出をはかるしかありませんでした。多数派であったが故に、苦しみがより少なかった場合もあったとはいえ、多くのシンハラ人も同様に信じが

たいジレンマに直面しました。こうした恐怖の全ては、集団的責任を信じることに由来します。被害を受けた個々人の圧倒的多数はまったく責任がなかったのにもかかわらずです。

集団的責任を負わせることは、仏教徒が言うところの、集団的な業を信じることと同じです。こうした考えが極度に広範囲に広がっていることを、我々皆が知っています。もし、あなたがユダヤ人でイスラエル国民だとして、あなたは自国政府によるパレスチナのアラブ人の処遇の仕方を全く間違ったものと思っているかもしれません。しかし、そう思っていることは、今世でのあなたの救済には、何の役にも立ちません。たとえ、あなたの善意によって、やがてあなたにより良い来世がもたらされるはずであるにしてもです。最近の出来事で言えば、ミャンマーやタイ、スリランカで、多数派を占める仏教徒と少数派のイスラーム教徒（ムスリム）との暴力的な衝突が現在起こっています。イスラーム教徒の中のスンニ派とシーア派の抗争は、現在は主としてシリアに焦点が当てられていますが、もっと大きな広がりを見せており、あまりにも敵意に満ちているため、二十年以内には両方とも全滅してしまいかねません。集団的な業を信じることがどのように人類の一部を破壊していくかを、私たちは実際、目の前で見ることができます。もし仮に、こうした人々が業についてのブッダの見解を理解し受け入れたならば、彼らはやがて生き延びて平和に暮らすことができるかもしれません。しかし、楽観することはできません。

決して罪にこだわるな
汝自身の浄化に集中せよ

どうすれば、私たちは反対の方向へと動き始めることができるのでしょうか？　私たちは単に危害について論じるだけでなく、罪についても論じる必要があると、私は考えます。

仏教徒は、以前の悪い意図を拭い去るとでもいったことができません。ブッダが教えたように、悪業は、たとえ悔い改めても、帳消しにすることはできません。しかし、もちろん、このことは、人間がいかなる意味

であれ過去の業の囚われ人であることを意味するものではありません。人間は向上し、未来において、より良い意図を持つことが出来ますし、そうしなければなりません。それ故、もし私が何か悪い行いをしたなら、どんな儀式を行っても状況を何ら改善することはできませんし、そういう意味で告解（懺悔）は無意味です。しかし、自分が悪かったということを認め、それを心に留めておくことが、私がより良い人間、つまり、仏教的にいえば、良い業を積むと表現できるような人間になるのを助けるのであれば、私はそうしなければなりません。

パーリ仏典の中の有名な経（スッタ）[5]には、次のような物語があります。ある時、アングリマーラと呼ばれる人殺しの盗賊が、ブッダのもとに近づいてきましたが、ブッダは、彼を改心させました。アングリマーラが僧侶になった後、人々は彼を恐れましたが、彼は大変優しく穏やかで、純粋に人格の力だけで、難産の婦人を救うことができたほどでした。アングリマーラは、自らの邪悪な過去を否定しませんでしたが、彼は明らかに何の罪悪感も感じていませんでした。彼は単純に、自分自身の人生の新しい一ページを開き、一種の聖人となったのです。

自分が悪かったと認めるのは、それ自体では何の価値もありません。その価値は、向上するために、その思いを生かすところにあるのです。罪悪感は、無用な感情です。多くの人々は、「私は過去に過ちを犯したのではないか」との罪悪感にこだわることで、自らを悲惨な状態にしています。確かに、誰かにひどいことをした場合、謝らなくてはなりません。しかし、それを超えて、既にやってしまったことをくよくよと考えるのは全く無意味です。実際、それは無意味というより、むしろ悪いことです。何故なら、それは、時間とエネルギーを消費しますし、その時間とエネルギーを、過去を忘却の淵に追いやって、良い人間になるために使う方がずっと良いからです。

私が、今から言わなければならないことは、正義が実行され悪人が罰されるのを見ることを常に第一に優先する人々、つまり、「幕引き」を信じている人々全て

の気持ちを逆撫ですることになるかもしれません。しかし、私の考えでは、仏教にできることは、私たちが復讐を求めるよりも、実際に他者を赦すことができるように、そして、活力を奪う罪悪感に屈するよりも、自分自身を赦すことができるように、私たちにはもっと忘却が必要であると教えることです。

私の言いたいことを示す、二、三の勇気づけてくれる実例があります。おそらく、最も注目すべきは、カンボジアで進行していることです。周知のように、一九七五年から七九年にかけて、カンボジアではポル・ポトの支配下にあって、およそ二〇〇万人が殺されました。このような激変を、社会はどのようにして乗り越えることができるでしょうか?

ポル・ポトは死にましたし、彼の主要な部下の幾人かも亡くなりましたが、国連は、現在に至るまで数年にわたり、戦争犯罪法廷を開き、犯人を裁判にかけ、処罰を下そうとしてきました。政府は極端に能率が悪く証拠書類を揃えられないので、そんなことをしても、ほとんど何の前進もないと、私は言われました。この能率の悪さは、実際は、或る種の智慧ではないかと私は思うのです。

ネルソン・マンデラは、牢獄から出て、アパルトヘイトの闇夜から祖国を脱出させた時、ちょっと変わった行動を取りました。ご存知の通り、彼は「真実和解委員会（Truth and Reconciliation Commission）」を設置したのです。そこでは、不当な扱いを受けた個々人に対して、人々は謝罪するように勧められました。しかし、確かに、それは、過ちのほんの一部の責任を取ることができるだけでした。主たる強調点は、過去を埋葬し、新しいスタートを切ることにあったはずです。より小さい規模ではありますが、同様の和解と自発的健忘との結合は、北アイルランドでも成し遂げられたと私は思っています。

繰り返します。必要なことは、敵を愛することができるようになることではなく、単に敵を憎むのをやめることです。過去の過ちを正そうという偏執を捨て、その代わりに、個々人が自分自身の心と行いを浄化することに集中することができるように、人々を説得す

ることが仏教にできるならば、確かに仏教には人類の存続に寄与する潜在力があると言えます。

注

（1）*Vinaya I*, pp. 73-74 (PTS).（邦訳『南伝大蔵経』第三巻〈律蔵三〉一二三～一二五頁）

（2）（訳注）大摩崖法勅第十三章。塚本啓祥『アショーカ王』（京都・平楽寺書店、一九七二年）二三八頁。

（3）Dulce et decorum est pro patria mori.（*Carmina III*. 2. 13.）邦訳 藤井昇訳『歌章』〈東京・現代思潮社、一九七三年〉一一八頁、鈴木一雄訳『ホラティウス全集』〈東京・玉川大学出版部、二〇〇一年〉三八九頁）。

（4）（訳註）邦訳 森祖道・川崎一成訳『インド・スリランカ上座仏教史　テーラワーダの社会』（東京・春秋社、二〇〇五年）。

（5）*Majjhima Nikāya II*, pp. 97-105 (PTS).（邦訳　関稔訳「盗賊アングリマーラ（アングリマーラ経）」、梶山雄一他編『ブッダのことばⅢ（原始仏典五）』〈東京・講談社、一九八五年〉）。

（Richard Gombrich ／オックスフォード仏教学研究所所長）
（訳・まえがわ　けんいち／東洋哲学研究所研究員）